

佳作

これからは

大阪府 関西創価高等学校二年 横山 大樹

「入院一七二日目、今日七月十二日土曜日。僕はついに、家に帰る事ができた。外出ができる様になるまで本当に長かったし、辛い事、悲しい事も乗り越えてきた。その分これからは、同じ事をもう二度と繰り返さぬ様にする、そう決意もできた。」

こう日記に綴ったのは中三の頃の僕だ。あれから二年が経つ。僕は中二の冬、拒食症という病気で精神科に入院し、半年以上の間、食事の代わりに管を通しての栄養補給とベッド上の絶対安静をやり抜いた。部屋にはテレビも無く窓もすりガラス。トイレは看護師を呼ばなくてはならなかった。思春期真っ只中の歳で凄く辛い事だっただろう、と思う人もいるかもしれないけれど、僕は何とも思わなかった。それくらい、生きる事に必死だった。僕は入院する事と病気の事を甘く見ていた。一、二週間、長くても一ヶ月で退院できるだろうと思っていたし、携帯なんかで外と連絡がとれたり、外の情報も入ってくると思っていた。それに、僕自身の中で精神疾患「なんか」

にかかる訳がない、という偏見のある考えが、精神科に入院しているのにあった。入院中は一日一日が物凄く長かった。夜も眠れず過ごしていたので余計に長かった。その分考える時間もたくさんあって、午前午後で分かれる担当の看護師の記録をとり続け、シフトの法則性を発見したり日記に自分の考えを綴ってみたり、退院後したい事を具体的に書いていっては希望を膨らませたりしていた。そうやって過ごしていると病気の実感が湧いてきた。

症状が良くなってきた頃、小学校の僕の恩師ともいえる先生がお見舞いに来て下さり、フランクルの「夜と霧」の話をして貰った。一緒にしてはいけないけれど、極限におかれた人間の心理状態と、先が見えない中での自分の闘いに共感が持てたし、勇気が貰えた。

「目は前に付いてるやろ。やから目は前向く為が付いてるんや。」

先生との会話の中で印象に残っている言葉で、この言葉のお陰で入院を「同世代の誰も経験した事のない事に挑んでいる。退院をしたら同じ悩みの人を必ず救ってあげる」と前向きに捉えて、実際に一年の入院期間と予定されていたのを四ヶ月短い八ヶ月で退院する事ができた。嬉しさで泣いたのも人生で初めてだったし、日記には「両親の言葉を絶対に理解し長いモノサシで、ゆっくり焦らず、目の前の山を登っていこう。」と書き込んだ。

しかしその後、元気になった僕は情けない事をしてしまった。

高校に入学し僕は陸上部に所属していた。ある日、母とテレビでガンと闘う女性のドキュメンタリー番組を見ていた。女性の症状は日に日に悪化してきて危篤状態に陥った。このテレビを見て母は

「アンタも二回危篤になりかけてんで。」

と僕に言った。僕はその時この事実を初めて知ったが、僕のした返事は

「ふーん。」

だった。自分の事なのに、たった二年前の出来事なのに他人事だった。

そんな中で仲の良い友人が学校に来なくなった。というか、来れなくなった。その子は病は違えど、僕と同じく心の病気になってしまっていた。それを知ってようやく、自分が自由や健康に慣れてしまっただけで、感謝が薄くなっている事に改めて気付かされた。自分に腹が立ち悔しくなった。闘病中の日記を読み返した。その気持ちを手紙に綴って、その友人に送った。相手も同じ気持ちだった。

「ありがとう。」

と感謝の言葉をくれた。その時、同じ悩みの人を必ず救ってあげる。という自分の決意を思い出す事ができた。

入院中、得た「感謝」と「感動」の気持ち。食事をす

る事、自分の足で歩く事、外の風に当たれる事、そして人の温もりを感じる事ができる事。どれだけ強く忘れな
いと誓っても、環境に慣れ、時間が経つと忘れてしまう。
これからは、僕はそうならない為に、闘病中の日記を
たまに振り返り、気持ちを固める時間をつくっていきこう
と思う。自分の経験を語り、同じ悩みを持つ人を救える。
自分をそういう風に成長させてくれたこの経験に、感謝
だ。